うるわし通信

一般社団法人
うるわしの桜井をつくる会
〒633-0091　奈良県桜井市
桜井1259エルトさくらい内
TEL&FAX:0744-43-7773
URL：http://lets.some.jp
E-mail：lets@some.jp

令和6年7月

総会に当たってのご挨拶

当会は2010年3月14日に発足、今年で14年になります。この間、各位のご尽力によりさまざまな事業を行って参りました。その活動を記した機関誌のうるわし通信も去年100号を発行するに到りました。そこで1～100号すべてを綴じ込んだ記念誌を制作しましたが、はからずもこの10年の桜井地域のあゆみの歴史的資料となったと感じております。

去年の歴史家、磯田道史氏を招いての講演会は大盛況でしたが、会場から邪馬台国の所在はとの質問に、それは纒向に決まってるじゃありませんかと明快に断言され、さらに第10代崇神、11代垂仁、12代景行天皇の山ノ辺王朝と纒向遺跡との関係についてはつながっていると考えるのが自然ですねと話されました。これは古代王権発祥の纒向遺跡の考古学的発掘が記紀万葉に書かれた神話と合致するという日本史上の大発見を意味しますが、まだ95%が未発掘でこれからが楽しみな地域です。飛鳥・藤原世界遺産登録運動も令和8年度目指して順調に進んでおり、その次は纒向遺跡とオオヤマト古墳群の出番です。これから官民あげてさまざまな活動をしてゆかなければなりませんが、今日はその重要な要素である景観力について日本景観文化研究機構理事長の　藤本英子氏を招いて公開講演会を実施します。継続は力なりと申しますが引き続き当会の事業にご支援賜りますようお願い申しあげます。

一社）うるわしの桜井をつくる会　理事長　堀井良殷

箸墓古墳

景行天皇陵

うるわしの桜井をつくる会公開講演会に参加して

うるわしの桜井をつくる会定時総会終了後に、京都市立芸術大学名誉教授の藤本英子氏を招いて「景観力」と題した公開講演会が開催された。同氏は大手電機メーカーのデザイン関連部署に所属し、都市デザインのコンペに携わるなど「公共空間デザイン」について取りくみ、地域の景観はその生活者が質の責任を負うべきと考え、生活者と行政、事業者をつなぐ役割を努めて来られた。特に、大阪府と大阪市が進める「水都再生事業」において「道頓堀川遊歩道・橋梁デザイン検討委員会」の委員として、遊歩道を道頓堀橋の下に通す為に地元と「浮体工法」を提案し、道頓堀遊歩道の御堂筋アンダーパスが誕生しました。その後、川床の取り組みは「北浜テラス」の実現にもつながっています。

会場では同氏の取り組みの説明があり、その後は、参加者と一緒に桜井駅南口から本町通りを目指し駅周辺のまち歩きが行われた、道中、「桜井まちづくり株式会社代表取締役社長」岡本健氏（うるわしの桜井をつくる会副理事長）の協力により登録有形文化財に指定された「蔵の宿櫻林亭」を案内いただき、本格的な茶室・大きな蔵・回廊のある座敷など数寄屋造りの佇まいに、講師参加者一同「桜井駅の間近に立派でこんなにも静かな邸宅があったのか」と感動されていました。一行は本町通りから伊勢街道・高校前通りを経て駅前と歩きながら、車止めカラーコーンや通学路であることを示す緑色に塗られたいわゆるグリーンベルトやフェンス・看板等の色についての提案や古い道標の見せ方のアドバイスなど、地域に人を呼び込むセンスについて学ぶと普段何気なく歩いている風景も、まちを素敵に魅せる環境づくりのポイントが多数隠されている事に気づかされました。

再び、会場へ戻り講師から「『景観まちづくり』はまず、行動です。日常の生活空間に誇りを持つことは、シビックプライドとなり、そこに暮らす人々自身の自己肯定感も高まる。個人の誇りは小さいけれど、大きな視野の変化につながる一歩の行動が、また次の行動の一歩になっていくのです。そして発言し語り合う、行動する市民が増えることでその思いが正に、関係者に伝わり、まちを変える・変わって行くことを願っています。」と提言がありました。「この町で育ったことを誇りに思う」「いい風景だな」「気持ちのいい道だな」と感じられる桜井らしい景観・将来に残したい景観とはどのようなものなのか、あらためて身近な風景を見直し、景観について考える機会となりました。

（事務局　ひがし俊克）

先住民族アイヌのいまを考える講演会に参加して

NPO法人さくらい人権ネットと先住民族アイヌのいまを考える会（以下「考える会」）共催の講演会が、6月1日午後に桜井市立図書館であり、編集子も「考える会」の一員として参加した。

多原良子さん

講演会には市内外から70名を超える参加者があり、講師の多原良子さんの「アイヌの歴史と和人の課題を考える」をテーマに、先住民族としてのアイヌの人々の歴史やその独自の文化等の紹介、そして多原さんの所属されているメノコモシモシ（女性<メノコ＞が目覚めて前に進むという意味）が取り組んでいる、アイヌ民族としての先住権・自決権の確立に向けた取組を紹介された。

何故なら、アイヌ民族が住んでいた大地は、アイヌモシリと呼ばれ、その地で独自の文化を築き、あらゆるものにカムイ（神）の存在を認め、カムイと共生する世界観のもとに、自然と共存する生活であった。その居住範囲は北海道はもとより千島列島や樺太（サハリン）南部に広く及ぶのであったこと。

しかし、幕藩体制下の支配や、明治近代国家の政策による抑圧（アイヌ名の日本名への変換や同化政策）・差別（アイヌ民族を「旧土人」と呼び、北海道に移住してきた和人に対して優先的に土地や漁猟権を与え、アイヌ民族には山野の狩猟に制約や集落の移転を強制等）によって、一方的に権利を奪われて生活を営むことさえも困難になった。10万人ほどいたアイヌの人々は、そのために激減して今日では2万人ぐらいになっていることなどを話された。

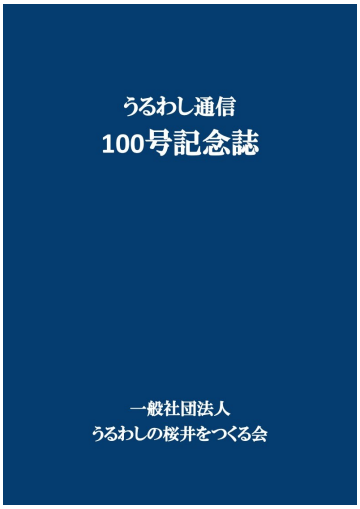
日本国のアイヌ政策は、2007年の「先住民族の権利に関する国連宣言」の採択を契機として、2019年に「アイヌ施策推進法」が制定されているが、「国連宣言」に明記された自決権、土地や領域、資源の回復や補償に関しては触れておらず、アイヌ文化の紹介や観光面での取組みに限定されたものになっている現状を、厳しく批判された。

今回の講演を聞いて、世界でおこなわれている先住民族施策に対して、日本の取組みは大変遅れていることを感じると共に、アイヌ施策が北海道の問題だけでなく、日本の近代化の中でアイヌ民族を抑圧・差別して来た歴史をしっかりと知っていくことの大切さを強く感じた。日本国民（和人）こそが、当事者であることを見つめなおすことが求められている。

しかし、国会議員がアイヌに対するヘイトスピーチを繰り返しおこなっている現実が今も進行していることを、その被害を受けている多原さん本人から提起され、私もまた多くの参加者も、そのための法的な規制や救済策の必要性を強く感じた学習の場であった。

（編集子　楠木克弘）

うるわし通信100号記念誌



この度、当会の機関誌『うるわし通信』が100号の発刊を迎えたのを機に、2011年7月10日の第1号から100号までをまとめた記念冊子を製作致しました。『通信』記事を通して本会の2010年3月発足より14年の歩みと共に、誰もが住みよい桜井市を目指す地域社会の様々な活動を再確認頂けるものとして、本記念冊子をご覧いただきたく存じます。

なお、本冊子の発行に当たりご支援を頂きました各方面の関係者の方々に、改めて感謝と御礼を申し上げます。今後とも、うるわしの桜井をめざして人と人を「つなぐ」当会のミッションを果たすべく努力を重ねたいと存じますので、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

＊ご購入希望の方は090-3652-8104(ひがし)までお申し付けください。定価5000円

桜井図書館友の会

● 読書会の日程です

7月27日（土） 『マイケル・K』 JMクッツェー著

8月14日（土） 『石垣りん詩集』 伊藤比呂美 編

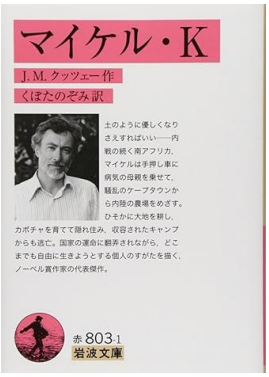
9月28日（土） 『笹まくら』 丸太才一著

10月16日（土） 『ある家族の会話』 ナタリア ギンズブルグ著

時間は、共に午前10時～12時

場 所：桜井市市民活動交流拠点会議室(エルト桜井2階内)

問合せ先 南部 ☎ 0744-43-5949 会員以外の参加も歓迎します。



編集後記

総会で景観力を活かしたまちづくりについて講演を頂いた。今後「通信」でも市内のJRや近鉄の駅周辺の地域づくりがどのように展開されているのか、されようとしているのかを『駅前探訪』シリーズで紹介していくことを総会で事業計画として確認した。少子高齢化が急速に進む中で、地域の顔でもある駅を活用した取組みを見出したいと考えている。(編集子 K)

うるわし通信発行人
ひがし俊克
TEL:090-3652-8104